

所報

愛知東邦大学地域創造研究所

2014.3 No.19



スポーツがつくる地域の力



地域創造研究所長
愛知東邦大学 人間学部教授
御園 慎一郎

東北に明かりがともった日本シリーズだった。昨年プロ野球日本シリーズは楽天が巨人に競り勝ち球団創設9年目で初の日本シリーズ優勝を果たした。2011年3月11日の東日本大震災以来「がんばろう東北」を合言葉に勇気と感動をもたらしてきた選手たちの戦いはその最終章で震災で傷ついた被災地の人達を歓喜の渦に巻きこんだ。第6戦で160球を投げながら最終戦最終回のマウンドに志願して立った田中将大投手、そして彼をマウンドに送り出した星野監督。このことをはじめ様々なドラマが見ている側の心を熱くした。「明らかに見劣りする戦力で創設された楽天の日本一は、ゼロからの出発となる被災者の励みになる」という言葉が東北の人すべての気持ちを代弁しているのではないだろうか。楽天イーグルスという野球球団がもたらした地域の人々の歓喜はこれからの被災地復興の大きな活力となるに違いない。まさに野球というスポーツが人々の心をついにし、地域の活力、地域の力を生み出す原動力となった好事例だと言えるだろう。

この楽天イーグルスの快挙を見るにつけ思い出されるのは、1995年1月17日の阪神・淡路大震災で被災した地域のことと

地元のプロ野球球団オリックスブルーウェーブス(当時)の活躍だ。当時震災の影響で地元神戸での開催が危ぶまれる状況だったが、「こんな時逃げだして何が市民球団だ。一人も観客が来なくてもいいからスケジュール通り絶対神戸でやれ」というオーナーの一喝でチームは奮い立つ。「がんばろうKOBE」を合言葉にペナントレースを独走した。日本シリーズこそヤクルトに敗れたが被災地と共に戦うチームの姿は地域に大きな力を与え震災復興の原動力となったのである。

震災という特別な環境下でのスポーツと地域関係を見たが、そのような特殊な関係だけでなくスポーツが地域の活力を生み出している例は枚挙にいとまがない。プロ野球のフランチャイズ制度、サッカーJリーグのホームタウン制度をはじめとして、すべてのスポーツはそれぞれが活動する地域と密接な関係を保ちながら活動を続けている。2020年の東京オリンピックに向けてこれからはますますスポーツの社会的重要性が増していくことだろう。そのことはスポーツが地域の力を生み出す原動力としての役割をさらに高めていくことと極めて高い相関関係にある。そういう観点で今後の我が国のスポーツ界の進展を見守りたい。

CONTENTS

【巻頭言】	「スポーツがつくる地域の力」 御園慎一郎……………1
【部会報告】	「スポーツ・ツーリズム研究部会報告」 杉谷正次、石川幸生……………2 「子どもとことば研究部会報告」 西崎有多子……………2
【中部産業史研究部会 定例研究会報告】	「東邦学園を創った下出民義のメセナ活動」 森靖雄……………3
【人材育成研究部会 定例研究会報告】	『段階的PBL型学習プログラム』構築に向けて 手嶋慎介・小柳津久美子……………4
【地域減災研究会報告】	「減災研究会報告」 御園慎一郎……………5
【秋の公演会報告】	「地球のステージII+震災復興篇」 宗貞秀紀……………6
【書籍紹介】	地域創造研究所の近著2冊……………7
【地域の話】	「うるぎミニコンサート」 矢内淑子……………8
【地域創造研究所 2013年度の主な活動】	……………8

スポーツ・ツーリズム研究部会報告

スポーツ・ツーリズム研究部会
愛知東邦大学 経営学部教授
杉谷 正次
愛知東邦大学 人間学部教授
石川 幸生

本研究部会では、わが国における「スポーツ・ツーリズム」の可能性を探ることを目的とし、とりわけ生涯スポーツの視点からスポーツ・ツーリズムを捉え、それをどのように推進していくことが魅力ある地域づくりにつながるかという研究をしています。

わが国におけるスポーツ・ツーリズムの成功例としては、北海道ニセコ地域の事例や沖縄県におけるプロ野球キャンプ誘致などがあげられますが、本研究部会では「スポーツ・ツーリズムの可能性を探る－国際リゾートをめざす北海道ニセコ地域の事例から－」（『東邦学誌』第40巻第2号、2011年12月）、「沖縄観光におけるスポーツ・ツーリズムの現状と課題」（『東邦学誌』第41巻第2号、2012年12月）を研究成果として発表しております。また、「スポーツ・ツーリズムの可能性を探る－生涯スポーツとしての「グラウンド・ゴルフ発祥地大会」を事例として」（日本生涯スポーツ学会、2012年10月）を学会発表するなど、積極的に研究活動を展開してきました。

そこで今年度は、生涯スポーツでスポーツ・ツーリズムを実践する地域のスポーツイベントにターゲットを絞り、現地調査（アンケート調査・インタビュー調査）を実施しました。具体的には、卓球大会で地域活性化をめざす岐阜県下呂市の取り組み（第6回下呂温泉いでゆ卓球大会）、グラウンド・ゴ

ルフでまちづくりを実践する鳥取県湯梨浜町の取り組み（第25回グラウンド・ゴルフ発祥地大会）、近年競技人口が増加しつつあるパークゴルフによる取り組み（2013全日本パークゴルフ大会）などの調査であります。

現在、本研究部会は、これまでの研究成果と今回現地調査で収集したデータをもとに研究をすすめており、最終的には研究叢書『スポーツ・ツーリズムの可能性を探る』を2014年11月に刊行する予定です。



第6回下呂温泉いでゆ卓球大会



第25回グラウンド・ゴルフ発祥地大会



2013全日本パークゴルフ大会

子どもとことば研究部会報告

子どもとことば研究部会
愛知東邦大学 人間学部准教授
西崎 有多子

本部会では、「子どもとことば」について5名の部員が様々な側面から研究をしています。今年度の現地調査として、第60回小学校教育研究発表協議会（愛知教育大学附属名古屋小学校）、第25回子どもの読書と教育を考える会夏季研究会（京都市）、児童言語研究会名古屋支部第38回国語教育研究集会、第41回JASTEC研修セミナー（大阪市）、平成25年度豊橋市立小中学校英語教育全国研究発表会、岡崎市立本宿小学校英語活動授業研究協議会、第4回関西大学初等部研究発表会（高槻市）等に参加または参加の予定です。

中間報告としての2名の部員からの報告は以下のとおりです。「子どものことばの発達に関しては、身近に存在する保育者の表現が影響していると考えられるため、インタビュー調査や質問紙調査を用いて、保育者や保育者養成校学生を対象に表現の質・育成を目的とした研究が有効である。また子どもの成長過程に合わせた言葉の習得の理解

のために、小学校国語科の研究発表会を見学した。各校がそれぞれ工夫した授業展開で、前提として「思考力」「問題解決力」を高めるために可視化された「思考スキル」を用いて、思考力や表現力の育成に取り組んでいる現状が理解できた。（藤重育子）、「豊橋市立小中学校は、17年度から英語教育推進特区として小3から中3まで小中一貫カリキュラムを作成している。「小学校英語」が教科化の動向を踏まえ、小中連携の橋渡しのカギは何か、を学ぶことは意義があるため、6年生の授業を複数見学した。「Skype（スカイプ）によるオーストラリアの小学生との交流」では、より理解される伝達方法の工夫により、伝わったときははじけるような笑顔が教室のそこそこにあふれ、生きた言葉でのやり取りの力を感じた。教室という疑似体験の場において、いかに命が吹き込まれた発話を引き出すかが、子どもたちが楽しく学び、習得し、中学英語へと結びつくカギの一つであると感じた。（金澤延美）

東邦学園を創った下出民義のメセナ活動

愛知東邦大学
地域創造研究所顧問
森 靖雄

はじめに

東邦学園は2013年に創立90周年を迎えた。その創設者である下出民義氏(以下敬称略)は福澤桃介と組んで、東海地方に次々と新事業を起こした事業家であった。当研究所の中部産業史研究部会では学内外の近代史研究者を結集して、民義らが活動した明治末期から第2次大戦期までの中部の産業史事績を発掘し、当研究所の研究叢書中『02近代産業勃興期の中部経済』(2004年)、『13戦時下の中部産業と東邦商業学校-下出義雄の役割-』(2010年)、『18中部における福澤桃介らの事業とその時代』(2012年)を発表してきた。そうした研究成果を踏まえて、東邦学園が90周年を迎えたこの機会に、下出民義に関わる幅広い諸活動のうち社会奉仕事業(メセナ活動)を中心に紹介する。



下出民義氏

下出民義という人

下出民義は、1861(文久元)年に大阪の岸和田で生まれ、1952(昭和27)年に数え92歳で名古屋で亡くなった。その間、15歳から小学校教員、30代に大阪の学校に移って校長在職。石炭商の法人化に関わって同社社員に転職した。3年後、同社倒産を機に取引先があった名古屋(熱田)へ転居して「愛知石炭商会」(当初は個人経営。のち有限会社)を創業した。当時は産業廃棄物扱いであった「粉炭」の活用法を開発して産を成し、やがて鉄道省への石炭納入業者にも加わった。その過程で、開発間もない北海道炭鉱(当初は開拓使経営)の福澤桃介(当時はまだ無名)と知り合った。

民義は、石炭商を営む傍ら法律知識と経験を活かして、経営不振企業の再建や企業合併などを手がけ、必要に応じて自ら経営を引き受けて軌道に乗せた。経営が行き詰まるケースの多くは資金不足であるため、金融機関や福澤桃介のルートで資金を調達し、経営を安定させて桃介らを社長に迎え、自分は経営実務を担うという手法が多かった。こうして対立中の名古屋電燈と名古屋電力を合併させて中部電力や関西電力の前身企業を設立したり、愛知電気鉄道(現名鉄)に豊橋-岐阜間鉄道を敷設させるなどの再編成を手がけたりした。

東邦商業学校の設立

民義の長男・義雄は、愛知一中から神戸高等商業学校(現神戸大学)を経て東京高等商業学校(現一橋大学)専修科(現大学院相当)へ進学し、ドイツ社会学派の系統をひく福田徳三に師事して研究者を目指したが、30代初めに名古屋へ呼び戻された。当初は父民義らがかかわった会社の支配人や専務に就くが、間もなく独自に投資を始めて約30の企業にかかわる実業家に育った。

その過程で、民義は「事業を任せられる人材の育成」の必

要を感じ、不振の商業学校(のち金城商業学校)を引き受けた後、1923年に東邦商業学校を新設した。創設費用にとどまらず、学校経営が軌道に乗るまで財政援助が続けられた。

日本社会学会支援と下出書店の設立

間もなく次男の隼吉が明倫中学校・第八高等学校を経て東京帝国大学(現東京大学)へ進学し、当時最新の学問であった「社会学」を専攻し始めた。1924年に「日本社会学会」が設立され、隼吉がその事務局を引き受ける。そこで、民義はこの学会を支援することにし、専従者の人件費を含む事務所経費や学会機関誌『社会学雑誌』発行費用の大半を負担した。傍ら、1915年東京神田に出版社「下出書店」を設立し、準備期間を経て1921・22年に学術書を主とした34冊以上を次々と発刊する華々しいスタートを切った。ところが1923年の関東大震災で自宅も書店も倉庫も全焼し、廃業を余儀なくされた。その費用はすべて民義が負担したが、こうした短命な出版社であったにも関わらず新分野を開拓したインパクトは大きく、「哲学の岩波、社会学の下出」と呼ばれるほどの影響力を残した。

明治文化研究会への費用支援

1924年、吉野作造らによって東京に民間研究組織「明治文化研究会」が発足した。時代はすでに大正期で、明治文化を記録して残そうという活動であった。明治期の資料集や論考集が次々と発刊され、世間や学会が注目した活動であったが、その活動費(大半は出版費用)を民義が頼まれてほぼ一人で負担したといわれている。

民義は、多額納税者議員としては異例に長く貴族院議員を務めたことにも見られるように、事業家として第一級の成功者であった。同時に社会的に有意義だと思えば惜しげもなく寄付や支援もする、今で言うメセナタイプの経営者であった。

『段階的PBL型学習プログラム』構築に向けて

※PBL Project-Based Learning の略。課題解決型学習の意。

人材育成研究部会主査
愛知東邦大学 経営学部准教授
手嶋 慎介

学修支援センター
准教授
小柳津 久美子

人材育成研究部会では2013年12月13日(金)18:00~19:00 A203教室にて、定例研究会を企画・主催しました。本部会では、2014年度に研究所叢書の発刊を計画しており、月に一度は部会内での研究会を開催しています。今回の定例研究会では、叢書の主題にもかかわる内容として『『段階的PBL型学習プログラム』構築に向けて』について、部会代表としてメンバーである小柳津准教授が報告を行いました。その概要は以下の通りです。

1. 他大学の取り組みから見るPBL型学習

近年、多くの日本の大学で、PBLを用いた学習プログラムが実践されている。しかし、その歴史は40年ほどに過ぎず、解釈は多岐に渡る状況である。

国内の幾つかの大学の取り組みを整理してみると、単位付与の有無、主たる主導者が教員・職員・外部委託。活動支援金も数10万~1000万と様々である。

つまり、大学ごとに「学生をどう育てたいか」に沿って、PBL型学習法を取り入れないと、打ち上げ花火的な存在となってしまう危険性が考えられる。

2. 愛知東邦大学就業力育成支援事業概要

本事業のタイトルは「地域連携PBLを核とした就業力の育成」である。ここで言う地域連携PBL手法を用いた科目が「東邦プロジェクトI~IV」である。

本学の就業力育成支援事業については、本学ホームページに掲載されているので、そちらを参照されたい。

(<http://www.aichi-toho.ac.jp/outline/gp/gp-pbl.html>)

3. PBL型学習プログラムの試行錯誤

PBLという手法が導入される以前から、本学では地域と連携した活動を積極的に行ってきた。これらの取り組みを継承しつつ、PBLという学習法を取り入れ、専門知識を活用する実践的学習びとして2011年よりパイロット授業を開始した。

パイロット授業で明らかになったこと

2013年の東邦プロジェクト実施を前に、専門演習等で知見を集めるためのパイロット授業を実施した。その結果として、多くのメリット・デメリット、学内の環境/ルール整備などの知見を集めることができた。

2年次キャリア系科目との連携

このような学習法に慣れていない学生も多くいることから、関連

科目である、2年次のキャリア系科目において就業力育成を意識させる仕掛けづくりや、東邦プロジェクトの授業説明を行った。

4. 段階的PBL型学習プログラムの取り組み経過

内外の知見を集めた結果、「東邦プロジェクトI」は段階を踏んだPBL型授業プログラムとした。

段階的学習プログラムの必要性

PBLに関するフォーラムでは「失敗させる」「修羅場を経験させる」と言う言葉がよく聞かれる。程度にもよるが若干の違和感を持った。

このようなプロジェクト型学習においては主体性が重要であり、主体性を引き出すポイントのひとつとなる「スキルを身に付ける」に着目し、まずは、座学(スキルの習得)+実践(スキルの活用)を繰り返す授業から始めることとした。

入門的位置づけとしてのPBL型学習プログラム

「東邦プロジェクトI」では教員のみならず、学生本人も成長が実感できる「ポートフォリオ」、「目標の設定」、「発表の場」「他者評価」などの仕掛けを取り入れ、PBLの入門的な位置づけとして現在実践中である。終了したところでまた、改めてその内容は報告させていただきたい。

5. 今後に向けて

授業はまだ、終了していないが、次年度以降に向けた動きも始めている。例えば、新カリキュラムでは、段階的取り組みを導入し、開講は1年後期からに変更している。また、環境・ルール整備についても少しずつではあるが行い、学内でのさらなる普及が促進されればと思っている。

今回、多くの方に熱心にお聴き頂けたことに感謝申し上げます。



「減災研究会」報告

地域創造研究所長
愛知東邦大学 人間学部教授
御園 慎一郎



千年に一度と言われる未曾有の大災害である東日本大震災が起こってから3年の月日がたとうとしています。

一旦災害が起こるとそのあとの対応は大変なエネルギーを要することは言うまでもありません。このことは地震大国である我が国の国民はすべて心に刻んでおくべきことです。地域創造研究所としては、地域の皆さんが災害への対処方法をしっかり身に付けて安全に生活できる為のお手伝いをするのも大事な役割であると考え一昨年度から震災とそれへの対応について考える研究会を開催してきました。

これまでの研究会の状況

一昨年度は「被災地の実態から学ぶ」をテーマとして四回開催しました。

第一回目は5月に災害直後に現地入りした名古屋市消防局のレスキュー隊長を講師として被災現場での救援捜索活動の実態を伝えてもらいました。

第二回目は7月に被災地支援ボランティアのNPO法人レスキューストックヤード代表から現地での悲惨な実例や精神的ケアの大切さと難しさを教えてもらいました。

第三回目は10月に愛知東邦大学と東邦高校の教職員と学生、生徒で被災地支援のボランティアに参加した皆さんの報告会を行いました。

第四回目は2月に防災の専門家の講演と愛知県庁、名古屋市の消防局の担当者と地元のコミュニティーの防災担当の皆さんでパネルディスカッションを行いました。

昨年度は研究テーマを災害時における「減災」に重点を置き、地元名東区を対象に実施しました。

第一回目の研究会は7月に「地域の成り立ちを知り、防災力を高める」をテーマに名東区の地盤形成の推移やこの地域に影響のあった巨大地震の歴史、名東区地域の都市開発の歴史などを学びましたが、それは第二回目のフィールドワークにつながっていきました。

第二回目は11月「街を歩いて、身近な地域の成り立ちを知り、防災力を高めよう」がテーマで、フィールドワークを行いました。実際に現場を見て説明を受けたことでこれまであまり意識していなかった地形の高低差、都市開発の際の切土、盛土による地盤の強度など防災の観点から地形をどのようにとらえるかということを知りました。

第三回は「皆で話し合い、



2012.11.10 第2回地域減災研究会
フィールドワーク風景

身近な地域の防災力を高め、災害による被害を減らそう」をテーマに、ワークショップを開催し多くの学びを得ました。



2013.2.9 第3回地域減災研究会



同研究会 ワークショップ風景

本年度は、災害のその時にその現場で何が起こっていたのかを知るという観点から現実に被災した方から講演をしていたことにしました。また、これまでは研究会は地域創造研究所の主催で本学の施設を中心に実施してきましたが、津島市に立地する学校法人平山学園と共同でも実施することとし三回の研究会のうち二回は津島市内で開催いたしました。

第一回は6月に教育の現場で何が起こったのかを知るをテーマとし「かけがえのない命を守る～大震災を体験して～」と題して宮城県女川町の女川中学の佐藤敏郎先生に本学を会場として講演をしていただきました。先生自身も被災者でありまたお嬢さんをなくされています。講演では被災し大切な人を失ってしまった子供たちの心の動きを俳句と同じ575の文字で表現するという試みの紹介をはじめとして実際に体験した人からでなければ何うことのできないエピソードなどを聞かせていただきました。



2013.6.22 第1回減災研究会

第二回目は10月に会場を津島に移して「学校として子供たちをどう守るか～東日本大震災からの教訓～」をテーマに再び佐藤先生に登壇していただきました。佐藤先生は宮城県の防災担当主幹教諭でもあり、災害時に備えるという観点からのお話もしていただきました。

第三回は企業経営の現場では何が起こりそれをどのように乗り越えていったのかということテーマに仙台を中心に環境関連事業を展開されている守屋隆之さんに「東日本大震災を乗り越えて学んだもの」と題して経営者の立場で震災をどう受け止めどう対処したかというお話をしていただきました。

本研究科としては来年度も今年度引き続き災害が起こったその時現場はどうなっていたのかということを知るという観点からの研究会を行ってゆくこととしています。

『地球のステージⅡ+震災復興篇』

地域創造研究所 運営委員
愛知東邦大学 人間学部教授
宗貞 秀紀



映像と語りと音楽と弾語りを組み合わせた コンサートステージ公演

昨年に初演開催した「地球のステージ+震災復興」に引き続き、平成25年10月13日(日)に本学A棟101号室にて、標題の地球のステージ公演会を開催しました。演者の桑山紀彦さんは宮城県名取市内で東北国際クリニック院長として精神科医師として患者の治療活動を続けておられます。傍ら、NPO法人地球のステージ代表理事を務めながら、世界各国への支援活動を続けながらも、国内外での「地球のステージ公演会」活動を、とてもハードで国内外をステージにして活動をされています。

18年前の初演公演会から2900回を超えるという公演活動でもあります。昨年は放浪の旅から多くのことを気づかされた「フィリピン、ソマリア、東ティモール、ガザ地区の危機篇」でしたが、『地球のステージⅡ+震災復興篇』の主要なあらすじは、次のようなものでした。

カンボジア、イラン、パレスチナ ～国境を越えて～

カンボジアでは、一人のカンボジア人青年医師の成長を通して、海外支援の意味を実感された動きステージ内容です。その青年医師はボランという名前ですが、16歳の時に父が病で倒れ、田舎に住んでいた自分達の村に医師がくるのが間に合わないために亡くなったのです。それを契機に、絶対に医師になり、田舎の村で医療活動をして、村人を父のような死に方はさせないんだ。と誓って医師を目指している青年との出会いが、海外医療支援活動の原点となっているというものです。

イランは、イラン震災救援活動篇として、震災で両親や兄弟を無くした子どもたちが、夢まで失いかけていたとき、サッカーボールを蹴りあうことにより、心を開き、現実立ち向かっていく「勇気」を創りあげたという心のケアと一つのサッカーボールとの交流の内容でした。

パレスチナ篇では、数千年前からパレスチナで暮らしていた地域に、50年ほど前に突然イスラエルという国ができ、住民はヨルダン川西岸とガザ地区という二つの地域に押し込められた生活が始っての出来事です。夜ごとにイスラエル軍の砲撃が続き、既に何十年も続いている中での命を救う医療活動の砲弾の中での恐怖の実践報告でした。

最後は、自身が高校時代に国内で自転車一週の旅で、人との出会いによる喜びを伝えるものでした。が、高校時代のロン毛生活で自信を失いながらもバイオリンやギターを習ったこと、そして、人見知りの自分が民宿のやさしいおばちゃんに出会ったことが、人との出会いの大切さを学んだというストーリーでした。



参会者の声(アンケートより)

アンケート内容をも報告します。

「昨年も参加しました。とても感動しました。愛知東邦大学さんもこうして地域の我々のために開催していただけると感謝しています。また、来年も来ますので案内をくださいね。」

「いやー。動画がきれいでした。それにギター、バイオリン、歌と語りが見事なものです。我々だけではもったいないので、来年は近所の人と一緒に来ます。ありがとうございました」。「桑山さんの世界に引き込まれました。しかし、国内での日常生活だけでは感じる事ができないことが多いことが解りました。やはり、勇気を持ってさまざまな国に出かけてみたくなりました。続編を楽しみにしています」。「テレビ漬け、ネット漬けのわが国では、特定な番組だけが、海外等の出来事を報じているだけであり、高度情報化社会となっても、世界の環境や出来事には無関心であってはならないといことを痛切に感じたコンサートでした」。

桑山紀彦さんからのメッセージ(書籍より引用)

「いろいろな国で、様々なことに挑戦した。そして、数えきれないくらい失敗もした。医者としてではなく、一人の人間としてボランティア活動は出来ることも知った。世界中のすてきな子どもたちと出あえたからわかったことなんだ。

いくつもの道を歩いてきた。いしころ道も多かった。いくつかの国境を越えてきた。命の重みを知る時だった。多くの子ども達に出会った。こころがふるえるほど揺れ動いた。そして、地球は生きるステージとなった・・・」

「地球のステージ公演会」が、お近くで開催される場合は足を運ばれると、非日常生活の世界に入り、新たに発見し気づかされる事は確実でしょう。

地域創造研究所の近著2冊

地域創造研究叢書No.19

『東日本大震災と被災者支援活動』

(唯学書房 2013.3.14)

東日本大震災と劇場型報道 2011年3月11日に宮城県沖で起きた「東日本大震災」は、日本人の大半が初めて経験した長時間連動型大地震であった。海岸に近い一帯では地盤沈下ではぼ

すべての堤防が崩壊し、海水の浸水が始まっていた。そこへ大津波が襲い、青森県から福島県へかけての海岸部幅数kmの地域に甚大な津波災害をもたらした。

発災時刻が週日の午後3時前、異常に長かった地震後の取材カメラや役場の記録カメラが活動中を巨大津波が襲ったため、その状況は「劇場型報道」とも呼べるほど克明にテレビで流された。

東邦学園の支援活動 愛知東邦大学では、発災後間もなく教職員組織「教職員・学生ボランティア活動支援委員会」が組織され、「ボランティア論」担当教員や大学生協理事らが協力して、学生たちの被災者支援活動を応援した。学生たちのまとまった活動としては、同年9月の大学生協募集の支援活動(宮城県七ヶ浜町)への参加と、10月のNPOピースボート災害ボランティアセンターの災害支援活動(同県石巻市ほか)への参加であった。

同じ時期に、東邦高校でも校内での募金活動などのほか、生徒・教員有志が、愛知ボランティアセンターが募集する石巻市への支援活動に、数次にわたって参加した。

地域創造研究所の減災研究活動 当研究所では御園所長の主導で、名古屋市名東消防署や大学が所在する平和が丘地域自治会などと協力して、「減災研究会」と銘打った講演・体験報告・ワークショップ型の研究会を相次いで開催した。

大学としても、ボランティア支援の担当課であった学生課が、学生のボランティア手記集「見方が変わった! 3.11被災地—東北ボランティア活動の記録—」を編集・配布した。

本書は、そうした諸活動のうち、2011年度の講演録(5回分)と東邦学園関係の学生・生徒手記(延べ85人分)を収録した記録集である。現場写真も多数収録されている。



地域創造研究叢書No.20

『人が人らしく生きるために』

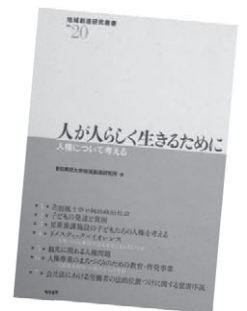
～人権について考える～

(唯学書房 2013.7.31)

愛知東邦大学地域創造研究所の人権研究部会での2010年度から2年間の取り組みをまとめたものである。この人権研究部会は学内の人権問題委員会のメンバーが中心となり、

様々な人権について見つめ直してみたいという思いのもとに始まった。人権について考える活動をしていくなかで、人権は、障がいのある人、病弱な人、生活が困窮しているといった社会的弱者といわれる人だけでなく、私たち誰もが生きていくうえでなくてはならないものであることを改めて理解することとなった。

「人が人らしく生きるために」というこの本のタイトルには、世界中のすべての人が、人として尊厳をもって生きていくうえで人権というものを失うことがあってはならない大切なものであり、万が一、人権が侵害されるような状態になったとしたら、人として生きていくために私たちは行動しなければならぬという思いを込めたものである。人権は人が生きているすべての場面に存在しているものである。そこで本書は各著者が日頃研究している領域に目を向け、そこでの人権について考えたものである。DVなどの被害者になってしまいやすい女性の人権、保護者からの虐待などにより施設で暮らすことになってしまった子どもたちの人権、人権に深く関わりのある貧困問題などについて考えている。また人権という視点を見過ぎてしまいやすい観光という領域では、旅行者と受け入れる国の人たちなどの人権について述べている。そして身近な私たちの街づくりにおいても人権に配慮しなければならないことにも触れている。本書は人権についてのすべての領域を網羅したものにはなっていない。本書により私たちが活動するさまざまな領域で人権という視点を忘れてはならないということを伝えることができたら幸いである。私たちは世界中のすべての人の人権が大切にされることを願い、これからも人権について考え続けていきたいと思っている。



例年とは一味違った「うるぎミニコンサート!!」

愛知東邦大学吹奏楽団部長
愛知東邦大学人間学部教授
矢内 淑子

平成25年8月25日(土)、一日の暮れゆく時を境に、売木村文化交流センターぶなの木ホール(長野県下伊那郡売木村)には、愛知東邦大学吹奏楽団が奏でる音楽と観客の拍手が響き渡りました。今年、初めて、「吹奏楽団うるぎミニコンサート応援ツアー」と銘打って企画し、榊理事長をはじめ成田学長、増田事務局長、保護者、教職員が、こぞ出て出向きました。

今年で4回目を迎えるミニコンサートについて、これまで支えてくださった売木村の教育長さんにお伺いしました。「南信州、茶臼山の北、山々に囲まれた盆地、標高800mの高地にある売木村も、少子高齢化が押し寄せています。高齢者たちは、若い学生さんが一生懸命演奏している姿を見ることで、元気をいただいています。今では、知名度も上がり、村民の皆さんが毎年楽しみにしてくださる『行事』の一つとして定着しました。今後も、村として演奏場所の確保と、チラシの配布などの町民への広報に、協力をしていきたいと思っています。」と、嬉しいお言葉をいただきました。

今年、3年生が中心になって、企画・交渉をしました。NHK連続テレビ小説「あまちゃん」の軽快なオーニングテーマ曲で始まった第一部:楽器アンサンブルでは、テレビのテーマソングやアニソン(アニメソング)を演奏しました。第二部:和風&コラボレーションでは、祭り衣装に着替えて、元気に「お祭りマンボ」、「津軽海峡冬景色」などの歌謡曲に続



いてマーチングで「千本桜」を演奏すると、会場は一気に盛り上がりました。さらに、今年、売木村の若いお母さんたちで構成されたママさんバンド、Go-Jazzの皆さんと愛知東邦大学吹奏楽団Green P'sのコラボを実現させました。キーラの演奏では、客席からの息の合った掛け声で、会場はステージと観客が一体となって盛り上がりました。アンコールの売木村の盆踊りの曲では、村の方々が踊られる様子を見様見真似で、老若男女、一緒に楽しく踊ることができました。聴いていただけてだけでなく、村民の方々と一緒に音楽を楽しみ、参加していただけるようなステージが叶った、一味違うミニコンサートになりました。

学生たちも、来場のみなさまから多くの励ましの言葉をいただき、帰途、感動を胸に早くも来年に夢をふくらませました。

地域創造研究所 2013年度の主な活動

- 2013年 5月 29日 第40回研究会『東邦学園を創った下出民義のメセナ活動』(企画:中部産業史研究会 報告:森靖雄氏)
- 2013年 5月 29日 地域創造研究所第13回総会
- 2013年 6月 22日 第1回「地域減災」研究会(於:愛知東邦大学)
- 2013年 7月 31日 研究所叢書No.20『人が人らしく生きるために一人権について考える』刊行
- 2013年10月 5日 第2回「地域減災」研究会/主管:清林館高等学校(於:津島市文化会館)
- 2013年10月 13日 第12回講演会(公演会)『地球のステージII&「東日本震災復興編」』(於:愛知東邦大学)
- 2013年12月 13日 第41回研究会『段階的PBL型学習プログラム構築に向けて』(企画:人材育成研究部会 報告:小柳津久美子氏)
- 2014年 1月 14日 第42回研究会『人が人らしく生きるために一人権について考える』刊行記念報告
(企画:人権研究部会 報告:宗貞秀紀氏・堀篤美氏・吉村譲氏・肥田幸子氏)
- 2014年 2月 20日 第3回「地域減災」研究会/主管:清林館高等学校(於:津島市文化会館)
- 2014年 2月 20日 研究所所報No.19発行
- 2014年 3月 10日 研究所叢書No.21『ならぬことはならぬ ～江戸時代後期の教育を中心に～』刊行
- 2014年 3月 17日 第7回名東カルチャーゾーン構想シンポジウム開催(於:愛知東邦大学)

※その他、各研究部会主催による研究会等多数

学校法人 東邦学園

愛知東邦大学 経営学部 人間学部 教育学部
(2014年4月開設)
東邦高等学校 普通科・商業科・美術科

所報 NO.19 2014年2月20日
発行・編集 愛知東邦大学地域創造研究所
〒465-8515
名古屋市名東区平和が丘三丁目11番地

TEL (052)782-1241 FAX (052)781-0931
URL <http://www.aichi-toho.ac.jp>
E-mail kenkyujo@aichi-toho.ac.jp